オトガイ部に長期間残存した異物の1例

田中 弥興・宇治 保義・坂本 彰宏・田 縁 昭

A foreign body of mental region: Report of a case

Yaoki TANAKA・Yasuyoshi UJI・Akihiro SAKAMOTO・Akira TAEN

緒 言

異物迷入はわれわれの日常生活において事故や災害等により惹起され、大部分は生体の異物反応により排除されるか、早期発見され除去される。

しかしながら、時として無症状のまま放置され、長期間体内に残留することがあり、新たな障害や症状を生じ原因究明に困難な症例に遭遇することがある。

最近、われわれは左側オトガイ部に約40年間残留し、無症状のまま経過した砲弾片と思われる異物に遭遇したので報告する。

症 例

患 者：[redacted] 62歳 男性。

初 診：昭和56年8月[redacted]日。

主 訴：左側オトガイ部の違和感。

家族歴：特記すべき事項なし。

既往歴：昭和17年、第2次世界大戦に従軍、中国にて至近距離で砲弾が破裂し、人事不省となり陸軍病院に入院、その際大腿部の外傷を受け、砲弾破片摘出術を受けている。その際、他の外傷についての記憶はない。

昭和38年、炭鉱落盤事故にて左手を骨折し、入院加療を受けている。

現病歴：2～3日前より左側オトガイ部に違和感を自覚したため、精査を希望し当科外来を受診した。

現 症：体格栄養ともに良好で触診にて、左側オトガイ部に異物の存在を認めるも、顔貌および口腔内粘膜に異常所見は認めなかった。また、臨床検査所見においても、異常所見は認めなかった。

X線所見：オルソパントモ撮影にて、左側オトガイ孔付近に約15×3 mmの長楕円形、境界明瞭な金属様不透過像を認めた。

写真1 顔 貌

また、咬合法撮影にて、下顎骨頰側に異物の先端が骨内に少し迷入した形で認めた。

臨床診断：左側オトガイ部異物。

処置および経過：昭和55年8月[redacted]日、局麻下にて、左側小臼歯部頤頰移行部に約3 cmの切開を加え、粘膜骨膜弁を剝離するとオトガイ孔下部に被膜に覆われた暗紫色を呈した異物を確認した。異物は容易に摘出され、周囲組織を十分搔爬し、手術を終了した。術後経過は良好であった。

摘出物所見：摘出物は、矢じり状、表面粗糙、全面黒錆に覆われた金属様物質で、大きさ12.7×1.6×0.9 mm、重量0.174 gであった。

摘出物分析結果：X線像および摘出物が磁石に反応することにより、鉄を主体とした金属と考えられ、本学工学部金属工学教室に分析を依頼した。その結果は表1に示すごとく、ビッカース硬度：744.2を示す。強磁性体であり、金属顕微鏡による組織の検定より、約0.4～0.45%炭素を含有する炭素鋼を焼入れして硬化したマルテンサイト組織を有するもので構造用鋼に属するという結果を得た。

熊本大学医学部附属病院歯科口腔外科

(主任：田縁 昭教授)

Clinic of Dento Oral Surgery, Medical School of
Kumamoto University (Chief: Prof. Akira Taen)

受付日：昭和58年3月3日

写真 2 オトガイ部および口腔内所見

写真 3 オルソパントモ撮影 (上：術前，下：術後)

写真 4 咬合法撮影 (左：術前，右：術後)

また、島津製 EMX-SM 型 X 線マイクロアナライザーによる分析の結果、Ni および Cr はほとんど認めなかった。

考 按

顎顔面領域における生体内異物迷入の報告は、著者らが渉猟した範囲では本邦において比較的少なく過去50年間に60例がみられた。その原因では表2に示すごとく、転倒事故16例^{1~16)}、医療事故13例^{17~28)}、交通事故8例^{29~34)}、戦争2例^{6,35)}、射撃事故2例^{36,37)}、不明19例^{6,7,38~53)}であった。

これらの症例は、原因不明のものを除いて、異物迷入後、一度は医師または歯科医師の治療を受けてはいるが、その際異物迷入を見落され、長期間無症状のまま経過したもので、これらは機能障害または異物への感染を起こし、何らかの症状を自覚して再来院し、組織内への異物迷入が確認されている。その症状は疼痛、腫脹、開口障害、咀嚼障害等がみられた。

また、白岩ら⁶⁾、佐藤ら²⁸⁾の症例のように、偶然X線撮影により発見されたものもある。

本報告例は、オトガイ部異物感を訴え、X線により発

見されたものである。
口腔領域における迷入異物の種類は、植物性のものが17例^{7~16,38~41,47,52)}と最も多く、転倒事故によるもの10例、原因不明のもの7例となっている。これについて、大野らが侵入の機会や時期が不明で、また転倒時に抜去したという事実がその確認を遅らせていると述べているように、原因究明に困難な症例が多く報告されている。次に、金属性異物が16例^{6,17~21,26~28,35~37,50)}、ガラス13例^{1~5,29~34)}、その他(魚骨、歯牙等)14例^{22,23,35,42~48,49,51,53)}であった。

表 1 摘出異物分析表

硬度および磁性	Hv : 744.2 強磁性体
組織構造成分	微細なマルテンサイト組織 C : 0.4~0.45% Ni, Cr : ほとんど含有せず

表 2 顎顔面領域における異物症例

原 因	異 物	症例数	原 因	異 物	症例数
転倒事故	ガラス	5	交通事故	ガラス	8
	枯 草	4	射撃事故	銃 弾	2
	竹 片	4	戦 争	砲 弾 片	2
	わりばし	1	不 明	イ ネ	5
	ヨシ切株	1		魚 骨	5
	く ぎ	1		歯 牙	3
医療事故	注 射 針	4		化学繊維	1
	歯 牙	2		ヒシの実	1
	バ ー	2		歯刷子片	1
	ブローチ	1		寄 生 虫	1
	インレー	1		枯 草	1
	像 影 剤	1		鉄 片	1
	留 置 針	1			
合 計					60

写真 5 摘出異物所見

表 3 長期間残留した異物症例

報 告 者	原 因	異 物	年 数	部 位	大きさ (mm)
清 水	交通事故	ガラス	10	左側頬部	25×7 40×20
十 川	交通事故	ガラス	12	右側頬部	—
大 浦	戦 争	砲 弾 片	12	左側頬部	12×9×5
白 岩	戦 争	砲 弾 片	15	左側上顎洞	—
高 橋	医療事故	注 射 針	25	右側下顎枝部	20
	医療事故	注 射 針	40	右側下顎枝部	—
*本 症 例	戦 争	砲 弾 片	40	左側オトガイ部	16.7×1.6×0.9

金属性異物では、医療事故11例、射撃事故、戦争による各2例、原因不明1例で、診療中に、注射針、タービン用バー、ヘーベル、ブローチ等が多く、器具が破折し迷入させたものである。本報告例も3年前に左側小臼歯部の抜歯の既往があり、ヘーベル等の破折片を疑ったが、摘出物の肉眼的所見および分析結果より、歯科用器具でないことが証明された。

また、患者自身に破弾片による大腿部の戦傷の既往はあるが、顎顔面の損傷を受けた記憶がなく、異物侵入の経過は判然としなかった。しかし、既往歴および異物の分析結果より、第2次世界大戦従軍時、負傷の際、見落された砲弾片が最も有力視された。

本報告例の原因と考えられるような戦傷によるものは、本邦では大浦ら³⁵⁾、白岩ら⁶⁾の2例が報告されているのみである。

迷入異物の残留期間については、喜田ら²⁾はほとんど2か月以内に再受診していると述べている。長期間残留した症例では表3に示すごとく、高橋¹⁷⁾の伝麻用注射針が40年間残留した症例が最も長いものであった。

また、ガラス迷入症例2例^{4),30)}は、X線撮影による判断可能であるという報告³⁾はみられるが、顎顔面領域におけるX線像の複雑性から初診時見落され、単に創傷の縫合のみにて処置されたため、異物発見が遅れ、長期にわたり症状の改善がみられなかったものである。

戦傷による砲弾片の残留については、いずれも長期に及び、白岩らが15年間上顎洞に残留した症例を、大浦らは12年間頬部に残留した症例を報告している。これらは戦争という特殊な状況下において損傷を受け、また迷入異物が小さかったため、見落され無症状のまま残留し、上顎洞に迷入した症例は偶然X線により発見され、頬部に残留した症例はStenon氏管狭窄症をきたしたため発見されている。

本報告例では、砲弾片が比較的小さく、部位的にもオトガイ部という口角下制筋、下唇下制筋の起始部であり比較的安定した位置にあるため、40年という長期にわたり無症状のまま経過したものであると思われる。

結 語

1. われわれは、62歳、男性の左側オトガイ部に約40年間無症状のまま残留した砲弾片と思われる異物に遭遇したので報告した。

2. 既往歴および分析結果より、砲弾片が最も有力視され、われわれが渉猟した迷入異物症例のなかで、高橋の症例につぐものであった。

稿を終えるにあたり、異物分析にご協力下さった熊本大学工学部理論金属学川崎頼雄教授に深謝する。

本論文の要旨は、昭和57年2月20日、第40回日本口腔

外科学会九州地方会で報告した。

引 用 文 献

- 1) 植木輝一，他：側頭部より移動した頬部異物の一例。口科誌 28: 604 1979.
- 2) 喜田豊子，他：頬部異物の1例。日口外誌 20: 286-289 1974.
- 3) 石田 啓：異物挿入症。日皮誌 75: 514 1965.
- 4) 清水正嗣，他：ガラス片が10年間頬に残留した1症例。口科誌 17: 696-700 1968.
- 5) 中富憲次郎，他：左頬部へのガラス片埋入による開口障害の1症例。日口外誌 15: 263 1969.
- 6) 白岩俊雄，他：興味ある異物4例。日耳鼻会報 62: 1656 1959.
- 7) 大野輝男，他：異物の迷入による慢性頬部炎症の2例。日口外誌 22: 211-216 1976.
- 8) 土井 尚，他：頬部異物の1例。口科誌 20: 616-618 1971.
- 9) 関野 一：異物。日臨外会誌 14: 110 1953.
- 10) 西嶋克巳，他：きわめて稀有なる頬部刺創の一治療例。口外誌 7: 133-136 1961.
- 11) 徳植 進：異物による開口不能の1例。日歯会報 2: 86-87 1945.
- 12) 矢富 正，他：扁桃及び顎下部に多量の異物(枯竹)が迷入した1症例。日口外誌 24: 1302 1978.
- 13) 小池初雄：口腔底に埋没せる異物による再発性膿瘍の1例。耳鼻咽喉科 6: 543 1933.
- 14) 般戸 準：口腔よりの異物(葎の茎)による慢性化膿性中耳炎及び乳嚢突起炎の1例。日耳鼻会報 38: 1470 1932.
- 15) 長谷川 敷，他：原因究明に困難を来した頬部異物症の1例。日口外誌 17: 586 1971.
- 16) 鈴木千賀志：顎下唾液腺実質内異物。東邦医事新誌 2953: 2735 1935.
- 17) 高橋庄二郎，他：長期にわたり下顎孔伝達麻酔時の破折注射針を有する2例について。日口外誌 17: 340-343 1971.
- 18) 中久喜喬，他：局所麻酔時に生じた注射破折の1例。歯科学報 69: 856-857 1969.
- 19) 野間弘康：下顎孔伝達麻酔時、破折した注射針を比較的容易に摘出できた症例。歯科学報 69: 857 1969.
- 20) 木次英五，他：口蓋舌弓付近にブローチの破折迷入した1例。口科誌 21: 757-762 1972.
- 21) 高森晴巳，他：顎骨内異物の一例。日口外誌 30: 353 1981.
- 22) 木村 享，他：咽頭側壁部に迷入した歯牙の1症例。日口外誌 24: 995 1978.
- 23) 堀田 一，他：18 抜去途中行方不明になったその歯牙を1年1か月後に取り出した1症例。口科誌 16: 412 1967.
- 24) 小野進一郎，他：診療事故3例。日口外誌 15: 263 1969.

- 25) 榎本昭二, 他: 上顎洞上壁に異物のみられた1症例. 日口外誌 20: 168-172 1974.
- 26) 佐藤敏明, 他: 透視下において摘出した異物の1症例. 日口外誌 24: 170 1978.
- 27) 中川 肇, 他: 上口唇内異物(タービンポイント)の1例. 日口外誌 23: 1961 1977.
- 28) 坂元晴彦, 他: タービンバーの舌正中部迷入例. 日口外誌 25: 1437-1439 1979.
- 29) 岩本康文, 他: 脳腫瘍を疑わしめた口腔内異物例. 口科誌 6: 95-97 1957.
- 30) 十川和彦, 他: ガラス片迷入の3例. 日口外誌 22: 132 1976.
- 31) 木村友七, 他: 側頭窩下に圧入されたガラス片による開口障害を起こした1例. 口科誌 12: 86-89 1963.
- 32) 別府政次, 他: 交通事故によるガラス片迷入の2例. 口科誌 20: 681 1971.
- 33) 久保哲郎, 他: 交通外傷による顔面異物の一例. 日口外誌 21: 375 1975.
- 34) 内田 稔, 他: 交通事故によるガラス破片頬部迷入の1症例. 日口外誌 15: 121-123 1969.
- 35) 大浦 稔: 砲弾破片の長期残留による Stenon 氏管狭窄症の興味ある症例について. 口外誌 4: 273-275 1958.
- 36) 安藤美則, 他: 下顎骨異物の摘出例. 口科誌 10: 231 1961.
- 37) 李 克平, 他: 口腔内銃創の1経験例. 日口外誌 25: 1665 1979.
- 38) 坂井長興: 耳下腺の一異物例. 耳鼻咽喉科 5: 629-630 1932.
- 39) 加藤二郎: 異物(稲穂先)に依る化膿性耳下腺炎兼頬部膿瘍. 東邦医事新誌 2903:2549 1934.
- 40) 大島光信, 他: 耳下腺排泄管異物に因る化膿性耳下腺炎並びに蜂窩織炎の1例. 日耳鼻会報 48: 958 1942.
- 41) 福田道男, 他: 顎下腺排泄管に迷入せる異物の1例について. 歯科展望 20: 1296-1298 1962.
- 42) 奥井 寛, 他: 魚骨と考えられる異物迷入により顎下唾液腺に発生したいわゆる Küttner Tumor の一症例. 口科誌 28: 374 1979.
- 43) 重久 智, 他: 魚骨片刺入に因り発生した舌腫瘍の1例. 日本歯科評論 301:1377-1378 1949.
- 44) 佐藤寿平: 陳旧性異物を伴う舌下腺唾液腺膿瘍症例. 耳鼻臨床 42: 25 1949.
- 45) 石田勝一, 他: ワルトン氏管への魚骨の刺入によりガマ腫が発生した1例について. 口外誌 1: 115 1955.
- 46) 久野吉雄, 他: 顎下腺管内に迷入した異物を核として形成されたと思われる唾石の1例. 日口外誌 17: 52-55 1971.
- 47) 原 朝雄: 興味ある異物の2例. 東邦医会誌 1: 36-38 1954.
- 48) 木次英五, 他: 顎骨内に圧入埋伏されたと考えられる第1大臼歯の2例. 口科誌 20: 117-122 1971.
- 49) 岡田 孝, 他: 歯牙の迷入に起因する口腔底炎の1例. 口外誌 10: 334 1964.
- 50) 松瀬洋一, 他: 6年間頬部に埋入した異物の興味ある1例. 日口外誌 16: 204 1970.
- 51) 百合野清: 右側「ステノン」氏管異物症例. 九州医専会誌 8: 455-457 1944.
- 52) 喜多文一郎: 異物性耳下腺化膿の一例. 耳鼻咽喉科 9: 175-176 1935.
- 53) 吉武一貞, 他: 頬部腫瘤からマンソン裂頭条虫(仔虫)を発見した興味ある1症例. 日口外誌 16: 241 1970.